

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1970101844		
法人名	社会福祉法人ひかりの里		
事業所名	めだかの学校シニア		
所在地	山梨県甲府市武田1-3-23		
自己評価作成日	平成26年11月15日	評価結果市町村受理日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

児童養護施設との併設施設のため、子どもとの交流を行い相互への刺激となっている。甲府駅に近いという事もあり、外に出掛ける行事を盛んに行っている。少人数での個別外出や利用者との話し合いも適時行い、家庭的な雰囲気을大切にして、利用者が「その人」らしく過ごせるよう配慮している。職員研修も行い、認知症の理解をしたプロの意識を持ち利用者へ接している。常に利用者の方向を見た介護が出来るよう職員の意識付けを行っている。「家庭的」な雰囲気を大切にして、アットホームな施設作りをしている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/19/index.php
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は甲府駅北口近くの武田通りに面した3階建てビルの3階フロアにある。2階に児童養護施設が併設されており、日頃から児童との関わりや近くの系列事業所の利用者と共に行事への参加や災害時の協力体制等連携して行っている。地域の人々から行事の情報を普段から話して貰うことも多く、地域に根差した事業所になっている事が伺える。昼食時の利用者へ関わり方や職員と共に居室や廊下のモップ拭きを行っている支援は、事業所理念の「一人ひとりの尊厳を大切にしたい支援」に沿った支援となっている。地域的にイベントに参加しやすく、個別外出や行事外出も多く行われており、居室のパイプハンガーに防寒着が掛けられてあり、冬場でも外出をしていることが伺えた。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	山梨県社会福祉協議会		
所在地	甲府市北新1-2-12		
訪問調査日	平成27年2月19日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

事業所名 めだかの学校シニア

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域密着を心掛けて、身体拘束やスピーチロックをなくして、利用者が孤独にならないよう意識してケアしている。会議等で周知徹底している。	運営方針である基本理念の4項目を解りやすくした理念「一人ひとりの笑顔を大切に尊敬を持って接する」に沿って、職員は日々の支援にあたっている。管理者は毎月の会議や研修時に折に触れ、理念を掘り下げて話をして職員間の共有を図り、具体的なケアに繋げている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の行事に積極的に参加したり、運営推進鍵などを活用して意見交換に努めている。地域のお店を買い物等で利用するようにしている。 また自治会に加入して、地域の一員として取り組んでいる。	自治会に加入して、広報・回覧板や民生委員などから行事の情報を得て、出来るだけ参加している。また、近所の店を利用したり、雪かきの手伝いをして、積極的に地域との関わりをもち、地域の人々からも、おすそ分け(おもち)を頂いて、日常的に声をかけて貰っており、地域の一員として交流している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	施設に見学に来てくれた際や、運営推進会議の時や、地域行事の時に相談に乗れるようにしている。 実際地域の方から相談に来る方もいる。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこの意見をサービス向上に活かしている	会議内で意見・要望ほ聞きそこの内容を職員会議などで話し、周知徹底してサービスの向上になるよう努めている。	2か月に一回運営推進会議を開催して、事業所の状況や行事の報告、研修会のお知らせをしている。家族からは事業所への感謝の言葉が多い、会議では様々な話題が出て活発な会議となっており、文化祭に参加する提案が出され合唱で参加して実現している。会議の内容は職員会議にて共有して、掲示している。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	日頃から電話等で相談出来る関係作りをしている。 逆に聞かれる事もあり、相互に信頼関係を作れるようにしている。	市の担当者へ会議録を届けたり、事故報告・経過報告時に outgoing、市担当者との関係作りを行っている。また日頃から問題事項が出れば解決に向けて電話で相談をしており、協力関係を築いている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束マニュアルに従い理解すると同時に安易に身体拘束をしないよう徹底している。また会議や内部研修でも言い続け職員に周知してもらっている。言葉によるスピーチロックも禁止している。	法人の月1回実施する研修会にて身体拘束をしないケアを学んでおり、職員は理解している。不適切な言葉遣いがあつた時は、職員同士で注意し合い、その都度朝礼・昼礼時に話して、職員間で共有している。外に出てしまう利用者には一緒に付き添って、気分転換をする等の対応をしている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	会議や研修等でも虐待について勉強会を行い、職員間でも言い合える職場作りをしている。職員の顔色ではなく利用者の顔色を見たケアを心掛け実践している。 虐待防止マニュアルを作り対応している。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修会等に参加して学ぶようにしているが、まだまだ難しい面があるので引き続き学んでいきたい。 以前制度を利用していた方がいたが、今はいないので今後利用する方がいても良いように学んでいきたい。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族とも話しやすい関係になるよう努めている。 電話連絡などとして入所後も安心して頂けるような配慮を心掛けている。			

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)	外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱の設置や口頭でクレーム等頂いた時は敏速な対応を心掛けている。 何でも話せる雰囲気作りをして話ができるようにしている。 そのために行事等にも参加してもらっている。	家族の面会時や運営推進会議に出席した時、また、医療受診支援時の電話連絡した際に意見・要望を言って貰っており、常に話がしやすい雰囲気作りを心がけている。出された要望の中で出来る事はすぐに対応している。家族とは何度か話をするうちに解り合って、信頼関係が築けるようになっていく。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や日々の業務の中で困った事などを聞き、働きやすい環境作りをしている。 職員にも丁寧に聞けるようにしている。	職員会議時に利用者のケアの事や様々なことを提案・要望が出来る。作品展に利用者の習字作品を出展したいとの提案に毎年出品することになった。普段から管理者は職員との話し易い関係作りを心がけていて、職員はなんでも話すことができ、勤務希望についても出来るだけ対応してもらっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員が気持ちよく働けるような配慮を行っている。能力ややる気に応じた昇給を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年に数回ある内部研修会などを積極的に推進して行い、各職員の質の向上を目指している。また内部だけでなく、外部の研修会にも積極的に参加する機会を提供している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内にいくつもの施設があるので、内部での交流研修は積極的に行っている。数年前には他施設研修会も行っていた研修などで他施設の方と交流ある時には積極的にコミュニケーションを図り情報交換している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の家族からの聞き取りや、入所後も要望等を聞き考慮したケアを心掛けている。そのために日頃の面会時や行事の時に積極的にコミュニケーションを図り関係づくりに努めている。 利用者本人にも、気付きを大切に、何が必要で、何が求めているのか？を考えたケアをしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前や入所後も要望等を聞き考慮したケアをしている。何かあれば電話等で情報交換をして、何でも話が出る関係性作りをしている。 出来る事や出来ない事も、極力伝えて家族と共に支援している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	柔軟な対応を常に心がけ、利用者にとって何が一番最適か？を常に考えてケアしている。思い込みによる決めつけた対応にならないように、いろいろな角度から物事を見る癖をつけて判断するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気作りで心掛け、自分の親や大切な方が入所しても安心して預けられるような環境・関係づくりに努めている。 職員もアットホームな雰囲気中で一日一日を過ごせるように仕事をしている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	普段の面会意外に、行事の時に家族にも来てもらい一緒に過ごすようにしてもらっている。家族と共に一緒に利用者をケアしていければ良いと考えている。		

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	個別外出の時や散歩時などになじみの場所に行ったり、面会等で知り合いの方が来た時は長居しやすい空間作りを心掛け本人のためにも気軽にまた来てもらえるよう配慮している。 地元の美容院や知人のところに遊びに行ったり、長年勤めていた職場にも行くようにしている。	入居時に関わりを継続していくために生活歴や馴染みの人などを把握するようにしている。知人や学校の友達が来訪した時は居心地良く過ごせるように配慮して、再度の来訪をお願いしている。以前利用していた美容室への送迎や個別外出として馴染みのデパート、職場などに行き、関係が途切れないように支援している。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	家庭的な雰囲気作りの中で、縁あって九名で生活をしているので同じメンバーで何年も生活出来るように温かい雰囲気を心掛けている。 そのために皆でいろいろな行事などを取り組んでいる。 孤立しそうな利用者には職員が関わり支援している。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後もお茶を飲みに来たり、行事に来てくれる家族の方が来てお互いが話し合える関係は継続している。こちらから連絡する時がある。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	個別に話をしたり「その人らしく」過ごせるように心がけている。 自分意志が表現出来ない方には、ご家族の意向を確認して対応している。	日頃から利用者に関わっているなかで、発した言葉「家に帰りたい」や名前を聞いて「名前の方はどんな関係なのか」と、家族と連絡を取り合い、利用者の意向に沿うように対応している。また、利用者の表情が良かった時、様子、雰囲気などで思いを理解して、職員間で共有して支援している。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前に聞き取りを行い生活歴を把握して、職員にも周知徹底してもらいケアに当たっている。利用者本人を良く見て行動など気になる所があったら本人、家族に確認している。 過去にはここが「家」と認識してくれた利用者もいた。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活パターンを把握して、その中で本人らしく生活出来るようなケアに努めている。それでいて、居室に常に一人でいて孤立しないような配慮をしている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成時に本人・家族の希望を反映できるような計画にしている。 面会時などに家族からの要望や気付いた事など、その意見を大事にしてケアにあたっている。それが実践に移していけるような努力を続けたい。	入居時に家族・利用者の希望を反映してケアプランを作成して、担当者会議で話し合い、入居後2か月位で職員の意見、気づきを取り入れて、プランを立て直している。見直しは3～6か月で行い、状態が変化した時はその都度変更して、家族から同意を得ている。家族が遠方の場合は郵送している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の記録を記入して、それを個々の介護計画にも反映したり、処遇会議での意見交換の材料としている。 職員間で気付いたことや統一事項は申し送りノートに記入してケアに活かせるようにしている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の身内で不幸やお祝い事があった場合など、職員が付き添い一緒に参加したりしてサービスのイメージを決めつけないような配慮を行っている。 勤めていたお店に職員付き添いで訪問したり、入所前に行って美容室に行くなどしている。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターと連携をとったり、地域住民との関わりで地域に溶け込みながら快適かつ安心・安全な生活が送れるよう努めている。			

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当法人内にクリニックがある旨を伝え、そこに病院を移してもかまわない利用者は紹介状をもらい健康管理のフォローを行っている。 病院を変わらずそのままの方も当然り家族との連携の中で受診等行い健康管理を行っている。	利用者・家族の希望するかかりつけ医となっている。入居以前からの主治医の受診は家族対応であるが、職員が受診支援をする場合もある。協力医への受診は職員が同行して、利用者の状態を医師に口頭で伝えている。受診する時や結果を電話等で家族に報告して情報の共有をしている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者が得変時などはリーダー→管理者に伝わり、その中で家族と相談して受診や対応を決めるようにしている。 また法人内の看護師とも連携してケアしている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際は病院との連携を密に行い、退院の許可がおりた時にはカンファレンスを行い速やかに対応するようにしている。 また入院中にADL低下することもあるので、介護計画も変更しながら医師・看護師ばかりではなくリハビリの職員からも情報を聞き対応している。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入院前に当然家族に伝えると同時に当法人にあるクリニックや特別養護老人ホームなどへの入所可能な旨は説明し広い選択肢の中で方向性を決めるようにしている。	重度化や緊急時の対応として、法人の運営する施設への入所や病院等の連携体制及び支援体制の説明をしている。重度化した対応では、家族の意向を踏まえ変化のたびに、話し合いを繰り返し、協力病院の医師の往診で入院するまでの支援を行った。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	最低年に1回は内部で救急法の勉強会を行い職員の技術の向上をしている。それ以外にも外部の研修で学ぶようにしている。 いざという時に落ち着いて対応するように話もするようにしている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害対応マニュアルを作成している。 年に数回避難訓練を行い、利用者はもちろん職員の訓練をしている。 年に1回は消防署にも行き、訓練と同時に消防署に施設を知ってもらう機会としている。	年に4回以上昼夜の災害を想定して避難訓練を実施している。利用者と一緒に避難経路や避難場所を確認したり消防署に出向き、消火器の使い方などを教えて貰っている。地域の防災訓練に参加しており、地域や同法人の近くの事業所との協力体制が出来ている。また、法人の危機管理室が実施する詐欺対応の研修会に参加して、防災の意識付けを行っている。非常用品等の準備もある。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「尊厳」をモットーに一人一人を大切に利用者のケアをしている。言葉使いを気を付けて甲州便の乱用は止めて、敬語と甲州便を組み合わせた声掛けを実践している。	守秘義務や情報の管理に関して職員は理解している。入職時には理念に沿って、その人の尊厳を大事にすることを学び、折に触れ、取り上げて話し合っている。トイレや入浴支援時にはプライバシーに配慮した言葉かけをしており、場合により隠語を使っている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	決められた日課だけではなく、利用者の顔色を見たケアを行い、利用者の「今」を大切にしたい働きかけを行っている。また衣服にしても利用者の思いを大切にしている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	決められた日課だけではなく、利用者の顔色を見たケアを行い、利用者の「今」を大切にしたい働きかけを行っている。「生活の場」を意識した支援を心掛けている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	女性の利用者だと家族が持ってきてくれた化粧品や衣服でオシャレな身だしなみを行っている。 男性の場合は整髪・髭剃り支援を行い身だしなみに気を配るようにしている。			

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)	外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	それぞれの役割を大切にして、一回の食事で多くの利用者が関わられるような工夫をしている。	献立は職員が作り、利用者の好きなメニューも取り入れている。食材の買い出し、油あげにすし飯をつめたり、盛り付け、片付け等、食事の一連の作業の出来る部分を職員と一緒にやっている。また、今日のメニューを読み上げたり、口腔体操をして、食事が楽しみになるように工夫している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人一人の状態や症状に合わせて食事やおやつを提供をしている。栄養摂取が充分ではない利用者の方には高カロリーな捕食を心掛け対応している。また場面に応じて水分チェック表をつけて対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後必ず口腔ケアを行っている。 車椅子の方でも洗面器等を使い口腔ケアを行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレの感覚や回数、量も人によって違うので状態を把握して、時間や状態を見て誘導してオムツではなくトイレで排泄が出来るよう支援している。	排泄が自立している利用者はトイレ使用後に声掛けをして確認している。トイレでの排泄を目指している利用者には食事前後や様子を見ながら、声をかけている、声を掛ける時には耳元で話したり、介助時には視線を外すことやトイレドアを閉めて、外で待っている等プライバシーに配慮した支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	薬での対応もしているが、極力自然排泄が出来るように運動や牛乳を飲んだりの工夫をしている。またそれを記録に残し連続性のケアになるようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は利用者にとって大切なので、その日の体調を見ながらだが束縛なく入浴が出来るようにしている。	毎日、午前・午後、利用者の希望で入浴している。ひとりにつき1週間に2～3回入り、夏場はシャワー浴を頻繁に行っている。入浴を嫌がる利用者には翌日にしたり、タイミングを計らって声をかけて入浴している。好みのシャンプーや決まった曜日に入る利用者もおり希望に沿った入浴支援をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人の状況に応じて、利用者の方がぐっすり休まれるように対応している。人によっては日中に少し仮眠をとる利用者もいる。 ぐっすり眠れるように日中の過ごし方や、電気、温度などにも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬に関しては危険なので、用途などをケース記録の後ろに添付して皆で理解して行っている。またケアノートと言う医務の申し送りノートを作り皆で情報共有して取り組んでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	その人らしく生活出来るよう支援している。 一人一人の出来る事を大事にして残存機能を活かしながら取り組んでいる。 草取りや、料理、ピアノ演奏など。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	個別外出や、全員で外に出掛けたりなどの外的刺激を大事にしている。 立地上外に出やすい環境などで有効活用している。	日常的な食材の買い出し、歩いて行ける程の駅や商店街のイベント見学、地域の行事「文化祭、夏祭り」への参加等出かける機会を多く作り気分転換をしている。また、個別外出「お墓詣り」の対応、系列事業所と協力しての季節毎の花見、大型ショッピングセンターへの定期的な外出等、職員も共に楽しみながら、外出支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)	外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物時に支払ったり、お金を持つ楽しみ、使う喜びを大事に出来るようしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	たまに電話で話しをしたり年賀状を書いて送るようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	生活の場を意識して家庭的な雰囲気になるようにしている。利用者が書いた作品などを掲示して雰囲気作りをしている。	対面式キッチンとワンフロアになっているリビングの壁には行事の写真や新聞の切り抜き、利用者の書いた習字が貼ってあり心地よく過ごせるようにしている。音楽が流れてくる中でソファにゆったりと座っている利用者、食事作りを手伝っている利用者や廊下・居間を職員と共にモップ拭きをする利用者があり、それぞれが持っている力を発揮して過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	過去には自分の居室に呼び話をしている利用者もいた。玄関前にソファを置いたりして限られた中ではあるが「空間」作りをしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	基本的に居室は利用者本人、家族が自由に使い、家庭的な雰囲気が出来ている。男性の利用者やキーパーソンの家族が男性の場合は殺風景な居室もあるが。	改築した時に家庭的な雰囲気が出るように居室入り口を障子紙を使った和風引き戸にしてある。頭上物入れが設置され、ベッド、厚手カーテンが用意されている。仏壇、家族の写真、利用者が制作した絵画、習字作品を身の回りに置いて居心地よく過ごせるように工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ワンフロアの環境なので生活しやすくなっている。段差や危ないと思ったところは極力改善して対応している。利用者が安心・安全に生活出来るよう常に考えている。		